

on to the next step



大阪経済法科大学

Keiho

Vol.30

2026年5月20日発行

自分のできるに繋がる、心のスイッチが入る校友会報



校友会WEB サイト
様々な活動報告を写真とともに更新中！

<https://www.keiho-u.ac.jp/graduates/alumni/>

CONTENTS

- P01. 会長挨拶・学長挨拶
- P02. 2025年度事業報告・2026年度事業計画
- P03. 地域支部紹介
- P05. 公認会計士・税理士養成プログラム「アカプロ」
- P07. 校友インタビュー「吉田 典宏さん(経済学部22期生)」
- P09. 校友インタビュー「島 由佳子さん(経済学部20期生)」
- P11. 懐かしの職員
- P12. 広報チーム座談会
- P13. 総会案内
- P15. 編集後記・読者アンケート

Keiho



多忙を楽しむ

『仕事は遊び、遊びは仕事』私の日常に対する物事への取り組み姿勢の基本です。視点を逆にすれば解決することが多くなると思います。仕事と遊び、真逆ですが遊びと考えると仕事も楽しい。私の知人に参加団体の会長等役職が40数団体に及ぶ人がおられます。時間的には忙しいのですが、仕事のできる人は時間配分に長けており、多くを兼務することは可能であると言っておられます。同じ様な人物が2～3人おられますがすべて同じような回答です。多忙を極めることは楽しいです。

私自身を見てみると地元自治会・町行政・自治連合会等で11の団体等の役職があり、そして校友会があります。日常は仕事があるため、土日曜日の8割強、各委員会の用事で平日に月に4～5日会合等行事の出席があります。

冬季オリンピックは多くの感動と勇気をもたらしてくれました。メダルを獲得した人、獲れなかった人、それぞれ日々練習という仕事で多忙な日々を過ごしています。その練習という多忙な日々が苦しみの中から喜びが生まれるという言葉の通り、喜びが楽しみに変わっているだろうと思います。

経法大の卒業生という共通項のもと、忙しくて校友会への参加は難しくとも、多忙を楽しむ。新しい出会いや発見を楽しむ。校友会への人脈を見つけてみませんか。本会報を一読いただき、校友会へのご意見等があれば遠慮なく事務局に申し出て下さい。多忙を楽しむために、あえて忙しさにチャレンジしましょう。

MESSAGE

校友会
伴井 敬司 会長（法学部1期生）

学長挨拶

校友会会員の皆様には、日頃より母校の教育研究活動に温かいご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。昨年4月に学長に就任して以来、各界で活躍される卒業生の皆様の歩みに触れるたび、大学として本学が担う役割の重要性と、未来へ広がる可能性の大きさを実感しております。

18歳人口の減少や国際情勢の変動など、高等教育を取り巻く環境は大きな転換期を迎えています。こうした時代だからこそ、本学は知識の修得にとどまらず、他者と協働し課題を解決する力と、自ら考え、判断し、行動できる力を育む教育を重視しています。

1971年の創立以来、「経済と法律は社会の両輪」との理念のもと実学教育を推進し、現在は4学部1研究科体制で少人数教育を基盤としたきめ細かな指導を展開しています。留学生と日本人学生が共に学ぶ「国際共修」の推進や、「スポーツ憲章」に基づく人間形成重視の課外活動も、本学の特色ある取り組みです。

また、専門教育の充実と体系的な学修支援により、就職・進学や国家試験、公務員採用試験、難関資格試験等において着実な成果を重ねています。少人数教育の強みを生かした丁寧な指導とキャリア支援体制の強化により、学生一人ひとりの進路実現に責任を持って取り組んでおります。これまでに4万8千人を超える卒業生を社会へ送り出していますが、皆様が各分野で積み重ねてこられた歩みは、本学を支える大きな力となっております。

校友会は世代を超えた絆の場であり、総会や支部活動、在学生支援の取り組みは、母校と卒業生を結ぶかけがえのない力となっています。今後とも母校への変わらぬご厚情と、後輩たちへの温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。



大阪経済法科大学

山垣 真浩 学長

2025年度大阪経済法科大学校友会 事業報告

1 2025年 総会の開催(年1回)

第27回校友会総会 2025年5月31日(土) シェラトン都ホテル大阪

2 2025年 幹事会の開催

第1回	5/31	シェラトン都ホテル大阪
第2回	7/26	たかつガーデン
第3回	9/27	たかつガーデン
第4回	12/6	たかつガーデン
第5回	3/14	たかつガーデン

4 広報活動の充実

- ・校友会報第29号の発行(2025年4月)
- ・常時WEBサイト校友会ページとSNSで情報発信

5 在学生支援

経法祭在学生支援食料品配布、卒業記念品

3 2025年 地域支部活動支援

- ・第14回全国支部長会議 7/12開催
- ・支部総会の開催・支部活動援助費の交付

3/8		第19回 広島支部総会
6/14		第21回 岡山支部総会
7/5		第22回 高知支部総会
7/19		第17回 愛知支部総会
10/11		第15回 三重支部総会
10/25		第20回 石川支部総会
11/14		第16回 東京支部総会
11/15		第14回 福岡支部総会
2/7		第2回 関西支部総会
2/14		第21回 沖縄支部総会
2/28		第23回 香川支部総会



2026年度大阪経済法科大学校友会 事業計画

1 第28回校友会総会 2026年7月11日(土) シェラトン都ホテル大阪

2 2026年 幹事会の開催

年4回開催予定

4 広報活動の充実

- ・校友会報第30号の発行
- ・常時WEBサイト校友会ページとSNSで情報発信

5 在学生支援

経法祭参加企画の実施、
卒業記念品・卒業祝賀企画の実施

3 2026年 地域支部活動支援

- ・全国支部長会議
- ・支部総会の開催・支部活動援助費の交付

広島支部総会	4月18日開催済
石川支部総会	5月23日
岡山支部総会	6月20日
愛知支部総会	7月18日
高知支部総会	7月予定
東京支部総会	8月予定
福岡支部、香川支部、三重支部、 沖縄支部、関西支部	未定

2025年度決算、2026年度予算に
つきましては、大学WEBサイト
校友会ページに掲載します。



Regional Branch Introduction

地域支部紹介

福岡支部

～世代を超えて広がる校友会のつながり～

法学部の20期生で、現在、福岡支部の支部長を務めています入嶋です。私が学んでいた頃の経法大はアットホームな雰囲気、友だちとラウンジで雑談したり、毎日学食の「唐揚げ定食」を食べたり、楽しい日々でした。卒業後は、在学中から続けていた引越し会社でのアルバイトを継続。一時期はアクション俳優を目指して芸能専門学校へ通ったこともありましたが、仕事が忙しくなり、そのまま引越し会社に就職しました。現在は、地元の福岡県北九州市へ戻って「かすうどん大福」を経営しており、今年で17年目を迎えます。メニューは、大阪でよく食べた「かすうどん」のほか、パスタ系うどんや、私が考案した宴会メニューの「かす鍋」も好評です。いずれはこの味を大阪へ逆輸入したいと思っています。私が校友会に関わるようになったのは約15年前。大学から、「参加費1,000円で飲み会をします！」という校友会の案内ハガキが届き、それに釣られて参加したのが始まりでした。参加してみると、世代を超えたいろんな人から話を聞けるのがおもしろくて、以来ずっと参加しています。10年ほど前に、前支部長から引き継ぐ形で福岡支部長に就任しました。

福岡支部 支部長
入嶋 修一(20期生)



現在の福岡支部は、年に一度の支部総会を中心に活動しています。参加人数は10名ほどですが、九州には福岡支部しかないため、山口、大分、佐賀などから一泊して参加するメンバーもあり、じっくりと親睦を深めています。私自身が仲間とワイワイ過ごすのが好きな性格のため、校友会の活動も楽しんで行っています。校友会全体の年齢層が上がる中で、私たちの世代が頑張って、「若い世代が参加しやすく、プラスの刺激を受けられるような場」を整えて、次世代へつなげていくことが我々の役割だと考えています。今後は、他の活発な支部にならって、参加人数を20人、30人と増やしていきたいです。また、支部での活動を通じて、大学のブランド力向上にも貢献し、恩返ししていきたいと思っています。「また来たい！」と思ってもらえるような楽しい企画を考えていますので、ぜひ一度、福岡支部へ足を運んでいただけたらうれしいです。

東京支部

～「久しぶり」が自然に言える場所～

東京支部会は、首都圏で働く・暮らす卒業生が、年齢や職業、卒業年次を越えて集まる、気軽であたたかい集まりです。「OB会」なんて堅そうだし知ってる人もいないし行きづらい。そんなイメージを持つ方もいるかもしれませんが、でも実際の東京支部会は、そんな心配がふっと軽くなるような空気があります。たとえば最近の支部会では、年齢も仕事も違う二人がここで出会い、協力して仕事をするようになったことが話題になりました。学生時代には想像もなかった形で卒業後に再びつながり、仕事のパートナーとして新たな関係が始まる――。そんな話を聞くと、「大学を通じたご縁って、時間が経ってからこそ面白いんだな」と感じさせられます。また、東京支部会に参加したことで意外な出会いもありました。なんと、かつて同じアパートに住んでいた二人がここで再会したのです。学生時代にはお互いを認識しておらず一度も話したこともなかったが、かつての住んでいた場所の話になり、「もしかして、〇〇アパートにいましたか……？」と話しかけてみるとやはり同じアパート。懐かしさと不思議なご縁に話が弾んでいました。こうした新しいつながりや懐かしい再会が、

東京支部 支部長
福岡 慎吾(20期生)



特別な準備や気合いなしに生まれるのが、東京支部会の魅力です。「卒業してから一度も大学行事に関わっていない」「知り合いがなさそうで不安」と思っているそんな方こそ、ぜひ一度、気軽に足を運んでみてほしいと思っています。東京支部は、いわゆる名刺交換の場ではありませんので、名刺がない方も、お子さん連れの方も歓迎しております。学生時代の思い出話から、今の仕事や暮らしの話まで、話題は本当にさまざま。共通点はただひとつ、「同じ大学で学んだ」ということだけ。それだけで、自然と会話が始まるのが不思議なところです。東京支部会は、「初めまして」と「お久しぶりです」がそのまま通じる場所です。もし少しでも興味が湧いたら「一度覗いてみようかな」くらいの気持ちで、ぜひ参加してみてください。新しいご縁が、きっと待っています。

石川支部

支部長: 山下 浩希 (10期生)



校友の皆さん、こんにちは。石川支部長をさせて頂いております法学部10期生の山下浩希です。石川支部は石川県に留まらず、福井県・富山県・新潟県・長野県を含めた北信越をエリアに活動をしています。校友相互の交流は勿論、全国総会出席や経法祭での模擬店にも積極的に出店しています。「明るく前向きに」をモットーに母校が経法大という唯一の共通点での交流ですが、実社会での校友の皆さんの活躍を耳にする度に嬉しくもあり誇らしくもあります。北信越の校友の皆さん、一緒に校友会活動を楽しみましょう。

愛知支部

支部長: 岸 泰至 (12期生)



皆さんこんにちは。愛知支部で支部長を仰せつかってます12期生の岸泰至です。愛知支部では「君に会えてよかった」を合言葉に毎年7月の第2週目or3週目の土曜日に名古屋市内のホテルで支部総会・懇親会を開催しております。今年は7月18日(土)名古屋クラウンホテルで17時からの予定で準備しております。毎回新しい校友も参加し20数名の校友が集い経法大での思い出や現状に花を咲かせ、和気藹々です。また、12月には三重支部と合同忘年会も開催します。いつも「参加して良かった、楽しかった…」校友達との出逢いに感謝しています。

三重支部

支部長: 濱口 元洋 (7期生)



伊勢神宮、松阪牛、伊勢えびなど全国的に有名な物も多く、海と山に囲まれ1,000kmにも及ぶ海岸線が有るのが特徴です。三重支部設立18年目を迎え、現在の支部役員は20~70歳代の(男性10名・女性2名)計12名で各世代バランス良く構成されアットホームな雰囲気、各役員が役割を分担して校友会活動に取り組んでおります。現在は中断しておりますが、愛知支部、校友会(組織部会)との連携をもとに岐阜県地域の支部設立に向けての判断及び東海地区(愛知、岐阜、三重、静岡)の校友との交流を積極的に図って行きたいと思っております。

関西支部

支部長: 斉木 秀昭 (18期生)



18期生経済学部関西支部長の斉木秀昭です。関西支部設立総会から2年が過ぎ、ハラハラドキドキでしたが順調な船出だったと思います。関西支部の理念としては継続と風通しの良さを2つの柱として運営していきたいと思っております。関西支部の活動としては、学園祭のお手伝いや2月に親睦を兼ねた食事会を企画しています。来年は昼間しか参加出来ない経法生や卒業生に向けたイベントを企画したいと思っております。ただ今模索中です。今後とも関西支部を温かく見守ってください。よろしく願います。

岡山支部

支部長: 中西 郁夫 (6期生)



岡山支部長をしている中西です。岡山支部の歴史は校友会の各支部の中でもそこそこ古いと思いますが、メンバー(入替り等もあり)が、中々増えないのが大きな悩みです。大体年2~3回交流会(内1回は支部総会)を行っていますが、上下関係もあまりないフランクで楽しい集まりです。いつも笑いの絶えない集まりです。現在出席のメンバーには経営者の方や企業の幹部の方も多くおりますので情報交換や相談があれば、解決のヒントがもらえるかもしれませんが、現在はこれと言った活動はできていませんが、地元出身学生との交流ができ、何かお役に立てればと考えています。

広島支部

支部長: 栢田 博昭 (3期生)



広島支部は西日本で最も多くの校友を輩出している支部です。支部のモットーは「輪と協調」ですが、明るく楽しい校友会にすることを念頭に、支部総会を中心として校友の輪を広げています。地域支部が活性することが校友会の発展に繋がるものと確信しています。また、広島のみならず、中国地区を始め全国の各支部との交流を深めていくことも校友会全体がより強固な組織になる礎になると思っております。全国の校友の皆さんがいろいろな形で校友会活動に参加されることを祈念します。

香川支部

支部長: 石塚 央 (6期生)



香川支部の掲げているテーマとしては、「香川支部の行事は、全員で楽しもう」を合言葉にしています。また、香川支部のグループLINEを通して伝達や要望を共有し、何でも気兼ねなく発信できるように進めています。校友会の支部活動を通じて、母校と地方の懸け橋となり、幅広い年齢層から交流の輪を広げて今後も情報発信をしていきたいと思っています。

高知支部

支部長: 岩井 司 (10期生)



大阪経済法科大学校友の皆さま、こんにちは。わたくし校友会高知支部長の岩井と申します。(10期生法学部卒)高知県民の県民性は明るく暖かく、熱しやすく冷めやすい(飽きやすい)というのが特徴です。特にお酒文化は有名ですが、飲めなくてもお友達になれますので心配はいりません。高知の思想家、植木枝盛(うえきえもり)が残した言葉に「自由は土佐の山間より出づ」というものが有りますが、この言葉通り高知支部は自由で開かれた支部として、「来る者拒まず、去る者追わず」の精神で楽しく交友の輪を広げています。

沖縄支部

支部長: 新里 靖 (14期生)



日本の最南端に位置する沖縄支部のモットーは「一期一会」です。支部総会、イベント、ボランティア活動等を更にパワーアップし楽しく笑顔あふれる支部活動を支部役員会員一同頑張っていきます。校友会員の皆様もお気軽にご参加いただけますと幸いです。夏休みに帰郷する在学生の力になれるような企画を検討し、沖縄県出身の卒業生を中心に、家族や友人たちとの交流を深めていきたいと思っております。

「アカプロ」で難関試験を突破し、活躍できる公認会計士・税理士をめざす

大阪経済法科大学で実施されている公認会計士・税理士養成プログラム「アカプロ (Program of Accounting Profession)」。

毎年コンスタントに合格者が誕生しており、2025年度は公認会計士短答式試験に2人、税理士試験(会計科目)に5人、日商簿記1級に4人(アカプロ合格率80%)が合格しました。会計系資格の中でも最難関といわれる試験で学生を合格へ導く秘訣は何なのか、担当教員の引地教授と藤原助教にお話を伺いました。

「アカプロ」は3つの学びが連動したプログラム

授業

理論を学ぶ

- ・財務会計論
- ・管理会計論
- ・監査論など

Sコース

得点力を鍛える

- ・公認会計士講座
- ・税理士講座
- ・簿記上級講座

ゼミ

人間力を磨く

- ・社会で選ばれる
- ・高度会計専門職となる力を養う

理論と実践を融合した独自のメソッド

——アカプロとはどんなプログラムですか？

引地:理論に強い研究者の教員と、実践的な知識を持った実務経験豊富な教員がタッグを組み、「授業」「Sコース」「ゼミ」を中心に少人数で学びながら資格取得はもちろんのこと、社会で活躍できる会計プロフェッションをめざすプログラムです。

藤原:私はこの大学の46期の卒業生です。私が学生の頃も試験対策のSコースはありましたが、資格試験の合格に向けた制度面のサポートが主となっていました。そこで、私自身の受験経験を踏まえて、もっと少人数教育の強みを活かした個別指導を強化し、確実に試験に合格できるプログラムを作りたいという思いがありました。また、公認会計士をはじめとする会計プロフェッションにとって、資格試験の合格ははじまりに過ぎないとの認識のもと、人間力の育成をはじめとするキャリア教育もプログラムに組み込み、アカプロをスタートさせました。アカプロは、単なる資格試験対策プログラムではなく、「難関試験の確実な合格」と「活躍できる会計プロフェッションの育成」という大きな思いを込めたプログラムになっています。

——アカプロの特長を教えてください。

引地:アカプロが目標とするのは、単に資格試験の合格ではありません。合格後、社会で同じ資格を持つ人たちと肩を並べたとき、「あなたに仕事を頼みたい」と顧客や職場の上司・同僚から選んでもらえる人になること、それが最大の目標です。

——引地先生と藤原先生の役割分担はどうなっているのですか？

引地:藤原先生が授業とSコースを担当し、試験合格に向けて学生を導きます。ゼミは私が担当しており、社会に出た後を見据えて、創造力や提案力を伸ばすような実社会に即した学びを展開しています。

——資格試験合格のための学習はやはりハードですか？

藤原:アカプロは、教員の受験経験等を踏まえた試験合格のノウハウが詰まったプログラムです。学生を合格へと導く精度は非常に高いと自負しています。このプログラムに則って、1日10時間の勉強を毎日継続できさえすれば、合格できます。ただ、その「1日10時間を毎日」という努力のハードルは極めて高いです。ですから、「なにがなんでも公認会計士・税理士になりたい!」と思える方におすすめのプログラムといえます。

徹底した寄り添いで合格へ導く

——アカプロが毎年実績を出している強さの秘密を教えてください。

引地:少人数教育のアカプロでは、一人ひとりの学生の性格や勉強の進捗を把握した上で、それぞれに合わせて面談や日々の声かけをして、学習面とメンタル面の両面を支えています。難関資格の合格を目指す学びは長く厳しい道のりですが、だからこそ教員が学生と同じ目標に向かい、共に進む姿勢を大切にしています。公認会計士や税理士になりたいという夢を持って入学してくる学生たちが、その志を最後まで持ち続け実現して卒業できるよう、全力で支えていきたいと考えています。

藤原:結局勉強するのは本人なのですが、僕ら教員はそのモチベーションが少しでも上がるように、そして後悔のない4年間を過ごせるようにサポートしたいと思っています。

引地:メンバー全員でチャットグループを作って、朝には「今日も頑張ろう!」、夜には「お疲れさま!」と毎日発信しているのもその一環といえるかもしれませんね。

藤原:チャットグループといえば、仲間の存在も重要です。アカプロでともに学ぶ学生同士は、ライバルであり仲間でもあります。切磋琢磨しながら学び合ったり、励ましあったり、大きな力になると思います。

簿記・会計学を極めたい人の第一志望の大学に

——今後のビジョンを教えてください。

引地:大阪経済法科大学を、「簿記・会計学を学ばならココだ!」と言われる大学にしたいです。簿記・会計学はビジネスの土台です。ビジネスに興味があるなら、本学の経営学部で簿記・会計学を学んでほしいですね。

藤原:アカプロの存在を知って、関西以外の地域からも学生が集まり始めています。今、アカプロは各学年5人~12人程度なのですが、各学年20人程度で総勢70名以上の学習集団になればと構想しています。そして、アカプロで学んだ学生全員が、自分の目標とする資格試験に合格し、理想のキャリアを歩んでいけるようにしたいと思います。

しんどいこともあるけど、後悔はさせない!

学生を導く引地教授&藤原助教の情熱の背景

学生たちに徹底して寄り添い、丁寧なサポートで合格へ導く引地教授と藤原助教。お二人の情熱の源ともいえる思いや背景に迫りました。



INTERVIEW

引地 夏奈子 教授

大阪府堺市出身。2001年関西学院大学商学部卒業。留学などを経て、2010年関西学院大学大学院商学研究科博士課程後期課程修了、博士(商学)。2015年より大阪経済法科大学へ。専門は財務会計・国際会計(ストック・オプション会計)。趣味はドライブ、楽器演奏。

——大阪経済法科大学の魅力は？

学生たちがものすごく素直だということです。卒業するときに「本当にこの大学で良かった」と泣いてくれる子もいて、藤原先生のように「大学に恩返しをしたい」と言ってくれる卒業生も多いんです。また、私のゼミでは「校歌」を大切にしています。食事会の後、みんなで校歌を歌うことも多くありました。卒業式で校歌が流れたときに学生たちから胸が震えたという言葉も聞きました。校歌は母校への誇りと愛校心を育む大切な象徴と考えていますので、今後も大事にしていきたいと思っています。



INTERVIEW

藤原 大花 助教

兵庫県明石市生まれ、中学時代に尼崎へ。星翔高等学校から、2016年に大阪経済法科大学へ入学。大学3年次に公認会計士試験合格。有限責任あずさ監査法人を経て、2021年9月より経営学部の教員に。専門は財務会計と監査論。趣味は料理とドライブ。

——大阪経済法科大学の魅力は？

先生方が学生をほったらかしにしないことが魅力です。僕の学生時代もしょっちゅう声をかけてくださったり、悩みを聞いてくださったり、よく気にかけてもらいました。

——なぜ公認会計士をめざそうと思ったのですか？

高校時代まではプロをめざして野球三昧の生活でした。スポーツコースのある高校で3年間、野球に打ち込んでいました。ですが、高校3年の夏が終わる頃、「野球で食べていくのは無理だ」と悟り、大学進学を考えるようになりました。そして、いろんな職業を調べる中で見つけたのが公認会計士でした。待遇面も含め「4年間勉強する価値がある」と感じて公認会計士をめざすことにしました。

——会計学のおもしろさとは？

簿記・会計学は、いわば「ビジネスの共通言語」です。簿記と会計学がわかれば、アメリカの企業であってもヨーロッパの企業であっても、大体の会社の成績を読み解くことができ、そこに魅力を感じました。数字の裏に、会社の戦略や、社員の頑張りが見えてくるおもしろさもあります。知っていて損はない、本当に魅力的な分野だと思います。

——先生のゼミについて教えてください。

実際の会社を題材に、理念から戦略、役員の顔ぶれまでを調べ、なぜその財務数値になったのかという生きたビジネスを学びます。例えば、経営破綻した会社であれば、数字の分析だけでなく、組織や経営戦略といった背景まで踏み込んで議論します。こうした学びにより、数字だけを読むのではなく、その背景にある経営判断や組織の動きを理解し、多角的にビジネスを考えられる力を養います。単に試験の成績が優秀なだけではなく、実際の企業の姿を踏まえて議論し、自分の考えを持てる人材を育てることをゼミのコンセプトとしています。

——引地先生と大阪経済法科大学とのご縁とは？

もともと父親が公認会計士だったこともあり、私も公認会計士になろうと思って関西学院大学商学部に進学しました。その後、教員となりこの大学で働くことが決まってから父に聞いたのですが、父も若い頃に非常勤でこの大学で簿記を教えていたそうなんです。親子で同じ大学、しかも父が持っていた科目と同じ科目を担当することになり、本当にびっくりしました。

——校友会のみなさんへのメッセージ

少子化で大学が淘汰される時代ですが、私たちはこの大学を絶対に守り、さらに発展させたいと日々奮闘しております。これからも、学生一人ひとりの可能性を引き出し、社会で大きく成長し「大化け」できるよう、最大限努力してまいります。

——ハードな試験勉強を継続できた理由はなんですか？

勉強は、平日も土日も、毎日同じルーティンを繰り返すようにしました。とにかく重要なのは習慣化でした。休むと元の感覚を取り戻すのが大変なので、休日だからといって遊ぶ時間は極力作らず、歯磨きをするような感覚で毎日勉強を続けました。また、それまで勉強よりも野球を優先していた自分にとっては、新しいことを学ぶことも楽しくて、もっと学びたいという気持ちもありました。試験前には、精神的に追い詰められてしんどい時期もありましたが、ちょうどいいタイミングで先生が「そろそろ息抜き」とご飯に連れて行ってくださるんです。そのおかげで、最後まで潰れずにやり遂げられたと思います。当時の勉強時間は1日平均8~10時間ほどでしたが、野球の練習と比べたら辛さはありませんでした。高校の野球部は強化クラブということもあり、しんどかったです。それと比べると受験勉強は、水も好きなきときに飲めますし、走らなくてもいいですし(笑)。ずっと座っているので腰は痛くなりましたけど、頑張れました。

——学生時代は朝活をされていたそうですね

朝7時のスクールバスで大学に来て、ジム(本学体育館)で筋トレをしてから授業に出ていました。試験勉強の追い込みで筋トレの時間が取れなくなってからは、体重が10キロも増えました。

——校友会のみなさんへのメッセージ

今の大阪経済法科大学は、大手企業をめざす学生も多く、支援体制も整ってきて、私が学生の頃よりもさらに良い方向に変わっています。今後も、大学の大化けにぜひ注目していただきたいと思います。



INTERVIEW

株式会社サンワコン 金沢支店長
女子軟式野球チーム「ダラーズ」監督

吉田 典宏 さん
経済学部22期生

石川県白山市を拠点に活動する女子軟式野球チーム「ダラーズ」。昨年、2年連続6度目の全国制覇という快挙を成し遂げました。メンバーは中学生から40代まで幅広く、地元だけでなく全国から選手が集まる熱いチームです。このチームを監督として率いるのが、本学経済学部22期生の吉田典宏さん(野球部出身)です。お仕事でも金沢支店の支店長を務める吉田さんに、組織のリーダーとしての取り組みを語っていただきました。

インタビュー：副会長 山下 浩希

仲間を信じ、組織を束ね、 明るく前へ。

山下: 昨年10月に金沢で開かれた石川支部総会に初めてご出席いただき、ありがとうございました。いかがでしたか？

吉田: これまで総会等の案内をいただいても出席したことはありませんでしたが、石川支部総会の案内に侍ジャパン女子野球日本代表のトレーナーを務めた尾崎貴汎さんによる「トップアスリートから学んだ成功脳の作り方」という講演があると知り、職場やダラーズに活かせるのではと思い、初めて出席しました。講演は期待通りの学びがありましたし、出席されていた校友のみなさんと知り合いになれたことが嬉しかったです。これからは毎年出席させていただきます(笑)。

山下: ぜひぜひ(笑)

小1から野球一筋

山下: それではインタビューを始めさせていただきます。まず、子供の頃から経法大野球部までの生い立ちをお話してください。

吉田: 福井県鯖江市の出身で、小学校入学と同時に野球を始め、他の競技には目もくれず野球に打ち込みました。巨人軍の前監督、原辰徳さんの直筆サインも持っています(笑)。

高校は、小学校時代に指導いただいた方が監督を務めていた地元の鯖江高校に入学し、野球部に入部しました。ところが、その監督が3月で退任されていて新任の監督に代わり、チーム全体これまでと勝手が変わり戸惑って少しまとまりに欠けるような状態でした。そんな中で「監督交代という変化を受け入れるしかない。やれることからやろう」と気持ちを切り替え、練習に打ち込みました。1年の秋にはベンチ入り、2年には2番セカンドとしてレギュラーになり、3年の時にはキャプテンを務め甲子園出場を目指しましたが、残念ながらベスト4までで夢は叶いませんでした。それでも、この経験はかけがえのないものとなりました。

大学に入っても野球を続けようと思い、秋に関西の大学数校のセレクションに参加して、鯖江高校の先輩がいた経法大野球部に入りました。当時の野球部は部員が100名ほどいて、甲子園で有名な高校出身の部員もたくさんいて最初は圧倒されました(笑)。

30TH INTERVIEW

大学近くの幸楽苑という寮に入り、大学の授業が終わると富田林のグラウンドに行き練習をするという毎日でした。

小学校から高校までは常にレギュラーだったのですが、さすがに全国から選手が集まる大学の野球部ではそうはいかず、なかなか思うような結果が出せず葛藤もありましたが、その経験が今に活きていると感じています。

山下:就職活動も野球を考えてされたのですか?

吉田:いいえ。大学までは野球を軸に進路を決めてきましたが、就職活動は野球のことは考えずに始めました。当時はちょうどバブル経済が崩壊し、いわゆる就職氷河期の始まりでした。福井県を中心に活動しましたが、なかなか決まらず、何とか福井市のサンワコンというこれまで理工系学生ばかり採ってきた総合建設コンサルタント会社に、文系卒の営業として入社しました。当時の私は建設分野については全くの素人でした。当然図面も読めませんでしたが、建設業をイロハのイから学び、人との出会いを大切に営業として働き、現在は金沢支店の支店長を務めています。



冬季は市内の農家さんの倉庫を借りて室内練習。

女子野球の監督に

山下:就職を機に野球をやめたのですか?

吉田:金沢で暮らすようになった時、同業他社の方から早朝野球に誘われチームに入れていただき、月に5・6試合、野球を楽しんでいました。そんな中、28歳の時、通っていたスポーツクラブでダラーズのメンバーと知り合いました。当時のダラーズは結成したばかりで監督やコーチという指導者がおらず、それがきっかけで女子野球のことは全く知りませんでしたが、私が監督として関わるようになりました。

監督になり2年目で全国大会に出場しましたが、1回戦で13対0という大差でコールド負けし全国のレベルを知り、その実力差に驚きました。同時に、一度は冷めていた野球への情熱が再燃し、練習量を増やして全国制覇を目指すようになったのです。

それから結成5年目で初のベスト8入りを果たしましたが、11年かけてベスト8が3回と伸び悩み、その頃から「今までの自分のやり方

ではこれ以上、上に行けないのでは・・・」と考えるようになりました。そんなある日、スタンドで他チームの試合を観ていたら、女子選手の声が全く聞こえず、監督やコーチ等男性の声ばかりが響く試合に違和感を覚え・・・、よくよく考えたら「私自身も、自分が前面に立ちすぎる指導をしていた」と気づいたのです。また、同じ時期に、当時のキャプテンからも私の指導方法について指摘を受け、私の表情や言葉が選手たちに過度な緊張を与えていたことに気づきました。

当時のキャプテン坂下さん:チームが伸び悩んでいるという現状を打破するために監督が熱くなって指導してくれていたのを私たち選手は理解していました。しかし、このままでは監督の顔色を気にして、自分の考えを持たない(持てない)主体性が発揮しづらい雰囲気になってしまうと感じました。これでは絶対に強いチームになれないと考えて監督に意見しました。すると監督も感ずるものがあつたようで、熱心な指導はそのままに、少しずつ笑顔が増えてきました。すると監督の笑顔に比例して、チームのムードも徐々に明るくなっていったのです。

本気で楽しく

山下:練習を見させていただきましたが、前向きな明るい掛け声がグラウンド一杯にこだまして、みなさん楽しそうに練習してますね。

吉田:チームのみんなは全国制覇という目標に向かって本当に一生懸命に取り組んでいます。ですから、ミスをしてでも責めません。いちいち指摘するまでもなく、ミスをした本人が一番わかっているからです。ミスを責めるよりも、どうしてほしいかという目標を伝えることが重要です。そうすれば、選手たちはそれを踏まえて自主的にテーマを決めて練習します。僕は笑顔でサポート役に徹することで、チームが明るくなり練習も楽しくなり、これまでどうしても超えられなかったベスト8の壁を破り準優勝、そして優勝と登り詰めたのです。いくら野球が好きでも楽しくなくては続きません。これは仕事でも同じです。目標に向かって心をつ一つにして本気で取り組む。本気で取り組むと、それが楽しくなります。私はこれから真正面からみんなに向き合い、野球も仕事も・・・人生を楽しみたいと思います(笑)。

山下:益々のご活躍をお祈りします。ありがとうございました。



練習後、全員で最高の笑顔で一枚。



有限会社ViVifala島ゆかこ
代表取締役

島 由佳子 さん
経済学部20期生

INTERVIEW

熱い志を胸に介護事業を立ち上げ、現在は和歌山の
業界団体でも中心的な役割を担う島由佳子さんに、
事業への想いを伺いました。

インタビュー：副会長 山下 浩希



笑って咲く花のように — 新しい介護への挑戦 —

原因不明の難病に

山下：まず、子供の頃から高校生の頃までを簡単にお話してください。

島：祖父と父が自営で布団店をやっておりまして、その長女として和歌山で生まれました。子供の頃、難病に指定されている原因不明の病気を患い、4歳の時に入院しました。それから2年半家に帰れず病院で過ごし、小学校の入学式も病院で行いました。その後、病院の先生から「できる限りの治療は行いました」と言われ、何が功を奏したのかわかりませんが奇跡的に回復し退院することができました。ただ、退院してもあまり学校には行けず、ほとんど自宅で教科書を読んで勉強をしていました。

学校に通えるようになってからも遠足や体育は禁止、給食も食事制限があり食べられないメニューもありました。1年を通して学校に行けるようになったのは4年生になってからで、その時はなんとか友だちができることを自分でもできるようになろうと必死でした。中学に進むと、やっと体育の授業にも出席できるようになりました。

乗馬で国体に出場

島：高校生になると、子供の頃から好きだった乗馬クラブに入るためにお金を貯めて、体を心配して反対していた親に内緒でクラブに入会しました。

経法大には高校から推薦していただき入学。和歌山の実家から片道2時間半かけて通学していました。教師になりたいと思い教職課程の科目も履修しようとしたのですが、授業が遅い時間から始まるため、馬に乗る時間を確保できるよう馬を選びました(笑)。おかげで社会人になって乗馬で国体にも出場し、3年前には和歌山県チームの馬術監督も務めました。最近は仕事が忙しく馬に乗る時間も限られていますが、一生続けたいと思っています。

秘書から介護士へ

山下：経法大を卒業されてからは？

島：卒業後、地元の和歌山県立医科大学第2内科学教室で秘書として4年間勤めました。その後、もっと新たなことにチャレンジしたくなり、キッチンカーを使ったカレー屋さんになろうと準備を始めましたが、当時発生した和歌山の事件の影響もあり、断念せざるを得ませんでした。これからどうしようと考えていた時、前に勤めていた病院の先生が「これから介護保険制度が創設され、介護の世界は変わるよ」と言っていたのを思い出し、介護の知識もないまま介護老人

30TH INTERVIEW

保健施設の面接を受けたところ、採用され働き始めました。深い知識もないまま飛び込んだ介護の世界でしたが、当時はまだ介護保険制度導入前の措置の時代で、想像以上に奥深く、学びの連続でした。そんな中、入居されている大勢のおじいちゃん、おばあちゃんにもっとできることがあるのではないかと感じ、働いているうちに「こんな風にしてみたい」「あんな風にしてみたい」という気持ちが芽生え、次第にその思いが強くなりました。そんな時に、介護保険制度のスタートにあたり介護事業を始めたいというある会社の社長と出会い、その会社の訪問介護事業を任されるようになったのです。それから、訪問介護だけでなく高齢者や障がいを持つ人々のためのデイサービスなど、事業の幅を広げる提案をしましたが、「事業方針として難しい」と言われ、独立して自分の理想とする介護事業を立ち上げよう決心しました。

山下: まだ30代前半で、そのようなチャレンジをするって凄いですね。

島: 独立にあたり、私についてきてくれたスタッフが何人もいたのが心強く、絶対成功させなければと拳を握りました。開業資金もすぐに底をつきかけましたが、独立を聞きつけた銀行の方が来られ、人生で初めて金融機関から借り入れをして経営を継続することができました。この借り入れのおかげで銀行との付き合い方を知り、信頼を作り、高齢者施設の建設など資金が必要な時に力になってもらえるようになりました。

介護の仕事というのは、調理や掃除から入浴やトイレの介助まで、日常生活の中でできないことのお手伝いをすることです。この仕事を始めた頃、認知症の方で、強い言動が見られる方がいらっしゃいました。夜、消灯時間が来てその方と添い寝をしたところ、これまで見せたことのない優しい顔で眠りについてくれたことがありました。この仕事は専門的な知識や技術はもちろん大切ですが、それ以上に相手を思う心が重要だと学びました。残念ながら入社しても長続きする人が少なく、人材定着が課題となっているのも現実です。ですから私はリーダーとしてスタッフと同じ立ち位置に立ち、スタッフたちと距離を縮め、おじいちゃん、おばあちゃんへの私の心からの想いをスタッフにしっかり伝えるように努めています。

スタッフの西川主任: 私たちは島社長の背中を見ながらこの仕事の使命を理解し、誇りを持って働いています。

山下: 島さんはご自身の会社だけでなく業界団体等の活動も熱心に行われていますね。



明るく元気なスタッフのみなさんと。

島: そうですね。ありがたいことに商工会議所や介護団体、なぜかわかりませんが(笑)、県や市から公職の〇〇委員等の委託を受け務めています。私は頼まれたら受けるタイプで、期待されてお声がけいただいた以上、期待以上の結果を残さなければと頑張っています。

「あんた、いい仕事してるね」

島: 小さい時の病気がきっかけで、何をするにも心配し「あれだめ、これだめ」と反対することが多かった父の横で、私をずっと見守ってくれていた母が職場を見に来てくれて「あんた、いい仕事をしているね」と言ってくれました。この母の言葉が私の介護事業へのモチベーションを支えてくれています。

幼少の頃、学校に行けないくらいの病気にかかったこと、馬が好きで毎日乗っていたこと、バブル経済崩壊で就職活動が思うように進まず苦労したこと、知り合いの紹介で秘書になったこと、秘書時代に介護の世界の将来性をたまたま耳にしたこと、それがきっかけで介護の世界で働くことになり今日に至っていること・・・、良いことも辛かったこともこれらすべてが繋がって今の自分があります。私は信頼できる素敵な仲間たちに恵まれて本当に幸せです。



入居している方には、しゃがんで同じ目線の高さで声をかけます。

山下: 将来の夢は？

島: 乗馬クラブの活動もできて、引退した競走馬が余生を送れるような牧場の隣に、一棟建ての建物をいくつか建てて、高齢の入居者が朝起きて窓から外を見ると目の前に馬がいるというのどかな世界。そして、その牧場は、障がいをもつ人なども馬の世話や他の仕事も選ぶことができる就労支援の場にもなる、そんな一つの村のような世界を創りたいです。

山下: 素晴らしいですね。是非、実現してください！最後に校友のみなさんにメッセージをお願いします。

島: 人の役に立つ喜びは、人生を豊かにしてくれます。そして、信じた道を歩む力になります。これまでいただいた愛を胸に、人生を大切に、ともに温かな未来を築いていきましょう。また母校のみなさんにお会いできること楽しみにしています。

懐かしの職員

元大阪経済法科大学
学生部次長 西澤十三夫さん

大学職員として就職課・学生課で長年学生支援に携わり、校友会設立後は事務局を担当された西澤十三夫さんに、本学での思い出を語っていただきました。

インタビューー 副会長 山下浩希

学生たちと一緒に 大学を創る！

創成期の経法大で歩み始める

山下: 西澤さんとは2000年に僕が求人手続きで就職課にお伺いして以来のお付き合いですね。今日はいろいろお話を伺います。まず、現在奈良県生駒市にお住まいですが、出身も生駒ですか？

西澤: いいえ。私は滋賀県の秦荘町(現・愛荘町)の出身で、小学校の先輩には西武鉄道の創始者の堤康次郎さんがいます。また、隣の豊郷村(現・豊郷町)では総合商社の丸紅の前身である丸紅商店の番頭の古川鉄治郎さんが生を受け、この湖東地方は「近江商人の発祥の地」と言われています。高校まではここで暮らし、その後東京の法政大学に入りました。卒業後の1973年に開学3年目の経法大に就職。大学では就職課に配属され、次年度から始まる1期生の就職活動に向けて、支援準備を担当しました。経法大初の『就職の手引き』は私が作ったんです(笑)。企業訪問も課長と二人で全国を回りました。私は就職活動真っ盛りの4回生と年齢も近く、就職課にやって来る彼らの悩みも理解でき、履歴書の書き方など一緒に考えて考えたり、逆に就職活動の内容を教えてもらったりして、我が事のように支援しました。

学生とともに築いた大学の礎

山下: 当時の大学はどんな学風だったのですか？

西澤: 新しい大学を創るための試行錯誤が続く、将来の可能性に満ちた黎明期でした。当時の学生たちは、何をやるにも自分たちが最初。教職員との距離も近く、すべてを一から一緒に創りあげようとエネルギーで、勉学はもちろん、クラブ活動などの課外活動にも一生懸命取り組んでいたのが印象的でした。

私は、就職課に6年ほど勤務した後、庶務課を経て教務課に移り、ゼミによる「少人数教育」を重視したカリキュラム改革に力を入れました。教育課程変更の申請のために行った文部省では、非常に厳格なご指導をいただき大変緊張感のある経験でした。教務課勤めが長かったのですが、1995年の阪神大震災の年に、再び就職課に課長として戻り、学生の就職相談に乗るようになりました。当時はバブルが崩壊し「就職氷河期」になっていました。就職の支援というと、大企業や有名企業への支援と思われがちですが、それだけでは

ありません。ある時、「地方の山村の役場で働きたい」という学生が、彼に縁もゆかりもない自治体の募集要項を持って相談にきました。そこで二人で作戦を考え、面接に臨むにあたり「徹底的にその村のことを調べ上げること、その村に骨を埋める覚悟があること、自分だからこそできる貢献を具体的に伝えること」等アドバイスし、見事に合格(採用)を勝ち取ったこともありました。希望者には模擬面接もよく行いました。就職活動では、口達者より、あがり症で口下手でも熱い想いをいかに伝えるかが大切だと思います。

その後、学生課に移り当時の学生部長の岩村教授と二人三脚でいろいろな課題に取り組みました。学生課の仕事は、学生生活に困難を抱える学生を支援する役割と、部活動や校友会、実行委員会など積極的に活動する学生をさらに伸びるように後押しする役割を担っています。エネルギー学生たちと一緒に過ごした時間は私にとって宝物であり、やりがいがありました。

校友会と歩んだ新たな挑戦

西澤: 1999年に校友会が設立され、学生課長として校友会事務局も担当し、校友会のみなさんと関わるようになりました。設立当初の校友会は幹事会も手探りで運営されていた印象でした。これではいけないと幹事会の後に懇親会を開くことを提案し、回を重ねるごとに幹事間の距離が縮まり、良い校友会にするためのアイデアもどんどん出て、校友会活動が楽しくなっていました。今は支部も増えて役員のみなさんを中心に活発に活動されていて嬉しく思っています。

山下: 経法大退職後はどのように過ごされていますか？

西澤: 私の退職を待っていたかのようなタイミングで(笑)、地域の民生児童委員を委託されました。引き受けた以上は一生懸命務めようと子供たちの見守りと高齢者の訪問をしていたところ、さらに老人会の会計も任されました。民生委員の役目を次の世代へ引き継いだ後は、自治会長になり地域活動に携わり忙しく充実した毎日を過ごしています。

昨年の5月に開かれた校友会総会懇親会に久しぶりに出席し、懐かしいみなさんと再会し楽しいひと時を過ごせました。みなさんお元気で活躍されていて嬉しかったです。

山下: これからも出席し校友会活動にご意見ををお願いします。

約2時間のインタビュー。40数年に亘る職員生活では楽しいことも嬉しいこともあればご苦労も多かったと思いますが、そのようなことは一切言わず、すべてポジティブに受け止めて「経法大に勤めたお陰」と感謝の気持ちでお話してくださいました。

広報チームが語る「広報のこれから」

創刊30号の節目を迎えた「校友会報Keiho」。
現在の広報チームでは第26号から制作を担い、世代を超えた卒業生たちがつながる場づくりを行ってきました。校友会をさらに活性化させるには、どのような広報活動が最適なのか。
メンバー5人が集まり、未来への展望を語りました。

Team Members

(左から) 安田 貴則
西山 蓮
山下 浩希
中津 広志
富山 源太郎



これまでの校友会報を振り返って

山下: 校友会報は今号で第30号。これを機に、校友会のみなさんにさらに喜んでもらえる広報の在り方について、率直に話し合いたいと思います。

富山: みなさん、第1号をご覧になったことはありますか？大学サイトの校友会ページで、過去号をすべて見られるんですよ。第1号は表紙以外すべて白黒で、歴史を感じます！

山下: 第1号でおもしろかったのは「卒業生からのメッセージ」ですね。校友会設立総会の出欠ハガキの通信欄に書かれていた近況報告が、そのまま掲載されていました。

安田: たとえ面識のない方でも「こういう仕事で頑張っています」といった近況を読むと、校友として「自分も頑張ろう！」と刺激を受けるんですよ。

山下: これこそが校友会報の原点なのだと思います。

中津: それから27年。以前は校友会事務局が主導でしたが、近年は広報チーム主導で制作するようになりました。

西山: 僕はメンバーになってまだ2年目ですが、広報チームの熱さには驚かされます。読者アンケートをもとに、「おもしろい仕事・活動をする卒業生」「懐かしの教職員」「お世話になった寮の方」など、読みたくなる企画を真剣に考えていますよね。

中津: 校友会報は、どんな卒業生が、どこで何をしているかを知り、交流できる場であるべき。今後はクラブに焦点を当てた「クラブ訪問」や「現役学生と卒業生の対談」なんて企画もいいんじゃないかな。

発信メディアの最適な在り方とは？

山下: これまで何度も議題が上がってきましたが、紙媒体の会報の存続についてはどう思いますか？



私が撮影しました！



安田: 紙のメリットは形に残ること。大学も設立から55年が経ち、1期生は73歳を超えています。その方々にも届けるには、やはり紙媒体が欠かせないと思います。

山下: 実は僕も「これからはデジタル媒体の時代だ！」と言いつつ、いざ冊子が届くと「やっぱり紙はいいな」と思うんですよ(笑)。

西山: 若い世代でも紙の需要は高いようで、ある大学が学生募集のための紙のパンフレットを一切やめたところ、受験者数が激減し、慌ててパンフレットを復活させたそうです。

富山: 校友会のメディアには、校友会報、ホームページ、Facebook、X、YouTubeがありますが、YouTubeで校友会総会の様子を配信したところ、「総会って、もっと堅苦しいイメージだと思っていた」「楽しそう」という反響があり、うれしかったです。

山下: 空気感が伝わるのは、動画ならではのですね。

中津: 記憶に残したい情報は年1回の「紙」で、行事案内・報告などは「ネット」でというように、メディア特性に合わせた使い分けが大切かもしれませんね。

今後このチームで実現したいこと

富山: 僕は、僕ら5人の個性がバラバラなのが、広報チームの強みだと思うんです。山下さんは未来志向のアイデアマン、中津さんは会社経営の視点からバシッと管理してくれる、安田さんは経法大loveの情報通、西山くんは若手の広告のブロ、僕はYouTubeやSNSの担当というふうに。

安田: 個性的だし年齢もバラバラですが、仲がいいんですよね。

中津: そうそう、定例会終了後もオンライン飲み会しているもんね。今後のビジョンだけど、僕は、今の経法大には留学生が多いし、海外で活躍する卒業生もいるから、世界中に情報を届けられるようにしたいですね。

富山: 僕は、個人の「好き」を深掘りするコーナーを作りたいです。第1回はぜひ安田さんに「野球愛」を語ってほしい！

西山: 僕は若手世代とのつながりを活用して、校友会の裾野を広げていきたいです。

安田: 広報のおもしろさは、反響をもらえること。みなさんから反響を拾って、双方向の広報をめざしたいです。

山下: これからも発信力を高め、鮮度にこだわりニュースはデジタルで発信、会報は大学や校友会と卒業生の皆さんとの交流の懸け橋となるようにしたいですね！これからも「あーだこーだ」言いながら面白く楽しくやっていきましょう。

総会 2026 7月11日(土)

年に一度の総会で、
懐かしさと新しい発見を分かち合いませんか。
旧友との再会が、また明日からの力になるひとときを。

昨年総会の様子を
YouTubeにアップ
しています！



第28回大阪経済法科大学校友会総会・懇親会のご案内

日時 2026年7月11日(土)
総会: 14:30~15:20
講演会: 15:30~16:30
懇親会: 16:40~18:40
※進行状況によって前後することがあります。

会場 シェラトン都ホテル大阪
近鉄大阪上本町駅ターミナル直結
総会・講演会: 浪速西の間
懇親会: 浪速東の間

参加費 5,000円(2026年3月卒業生は無料)
※同伴者1人につき5,000円(小学生以下は無料)

テーマは

絆!!



講演会 講師

演題:「人とヒトがつながることが、まち一番の活性化」

一般社団法人地域活性化プロジェクト縁GIN 代表理事 栢山義彦氏



講師プロフィール

- 地域創生プロデューサー 株式会社創縁舎 代表取締役
- 「まちづくりは複利」という思想を軸に、地域課題を仕組みで解決する社会実装型プロジェクトを全国で推進。
- 能登半島地震ではキッチンカー239台を統括し、8万食以上の炊き出しを実現するなど、官民連携の第一人者として活躍中。
- 2025年大阪・関西万博ではキッチンカーエリアのプロデューサーに選出され、食を通じた地域活性化に尽力。
- 年間300本以上の講演実績を誇り、現場経験に裏打ちされた実践的な知見を多くの自治体や企業へ提供し続けている。

栢山氏からのメッセージ

昨今、地域内でのつながりが希薄になりつつある中で、人と人とが顔を合わせ、支え合い、関わり合うことこそが、まちの元気や未来につながると感じております。講演では、能登での経験も交えながら、地域コミュニティの大切さや、これからのまちづくりに必要な視点についてお話できればと思っております。当日皆様とお会いできますことを、今から楽しみにしております。

栢田博昭副会長からの メッセージ

校友会は、世代を超えた卒業生同士が繋がり、お互い支え合う場です。様々な業界で活躍中の校友と繋がって下さい。必ず今後の社会人人生の為になる出会いの場になります。母校経法大の絆を感じりフレッシュしていただければ幸いです。

大阪経済法科大学 校友会の皆様へ

～公式SNSで、懐かしい母校と新しいつながりを～

校友会公式SNSチャンネルの運用を担当しております、卒業生の
富山源太郎と申します。

これまで校友会では「校友会報」を通じて母校の近況や卒業生の
活躍をお伝えしてまいりましたが、この度、よりリアルタイムに交
流できる場として、公式SNSでの情報発信を強化することとなり
ました。

SNSでは、八尾のキャンパスの「今」やイベント情報に加え、懐か
しい会報誌のアーカイブなどをいち早くお届けします。スマート
フォンの中でいつでも帰れる「デジタルの同窓会」として、世代を
超えた新しいつながりを楽しんでいただければ幸いです。
ぜひ右記のQRコードより各チャンネルをフォローいただき、当時
のご友人にもシェアをお願いいたします。SNSを通じて皆様とお
会できる日を楽しみにしております。

大阪経済法科大学校友会 公式SNS運用担当
富山 源太郎（経済学部32期）



YouTubeチャンネル

母校の風景や卒業生のインタビュー動画などを
配信中です。

URL: <https://www.youtube.com/@OUELalumni>



X (旧Twitter)

最新のニュースや、日々のちょっとした話題を
スピーディーにお届けします。

URL: <https://x.com/keihoalumni>



facebook

校友会の活動報告や、イベントの詳細情報を
詳しく発信しています。

URL: <https://www.facebook.com/keiho.koyukai>



お手持ちのスマートフォンのカメラでQRコードを読み取ると、各ページへアクセスいただけます。

総会申込方法

様々な手段で
総会出席の申込が可能です！

① QRコードからのお申込み

QRコードを読み取り、専用の申込フォームより
必要事項をご入力の上お申込みください。

申込フォーム



② お電話・FAX・メールでのお申込み

事務局までご連絡ください。

TEL・FAX: 072-941-8268

メール: kouyuukai@keiho-u.ac.jp

③ 郵便でのお申込み

同封されている申込用紙に必要事項をご記入のうえ、
お手持ちの封筒に入れてお送りください。

郵送方法

必要事項をご記入の上、点線で切り取りお手持ちの封筒に入れ、
宛名と切手を貼って投函してください。

- ① お手持ちの封筒を準備
- ② 点線に沿って切り取る
- ③ のりで封筒へ貼り付け
- ④ 切手を貼る



申込締切日 6/25(木)

大阪経済法科大学 校友会事務局 行
TEL・FAX: 072-941-8268
メールアドレス: kouyuukai@keiho-u.ac.jp

この用紙をそのままFAXでお送りいただいても問題ございません。

学部番号	（※学部番号を記入しない場合は、卒業生が所属する学部を記入してください。）
フリガナ	
氏名	
住所	〒
電話番号	
メールアドレス	

校友へのメッセージ

校友へのメッセージ

※郵便局の窓口で記入を希望する場合は、別途用紙が必要です。

郵送の方

点線で切り取ってお手持ちの封筒に貼って宛名としてご利用ください。



読者アンケート

あなたの意見が会報誌をつくる！

回答期限：2026年7月30日

読者の声
アンケート



入力簡単！

✓ 回答欄は
チェックボックス式！

入力時間はたった**2**分！

校友会事務局担当者が代わりました

7年間校友会事務局でお世話になりました、西村です。校友会行事を通していろいろな経験をさせていただきありがとうございました。事務局を離れても、校友会の発展をお祈りしております。

西村

校友会の皆様、はじめまして。木村と申します。火曜、水曜、金曜の10時から16時に事務局にあります。初めてのことでばかりでご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

木村

校友会報『Keiho vol.30』編集後記

校友会報『Keiho vol.30』をお届けいたします。

1999年7月、校友会結成を伝える創刊号から数えて30号という節目の会報です。

創刊号では校友会結成のニュースの他に会長・学長挨拶、役員一覧、会則・規定・申し合わせ、校友からのメッセージ等があり、特に校友からのメッセージは会報の3ページを割り約150名の校友からの校友会結成を喜び祝う声や自身の近況報告等々が載せられていました。

そのような創刊号から27年経ち今回のvol.30のテーマは【on to the next step 次の段階に進む】です。我々個人一人一人は言うまでも無く、校友会も時間の経過と共に進化成長していかなくてはなりません。勿論この校友会報も。そして節目節目で進化成長を確認し、チャレンジャーとして次の目標に向かって進むのです。僕が未だ若かった頃、尊敬する経営者の方から「走る自転車は倒れない！」というお言葉いただきました。「何言ってるんだ。当たり前じゃないか！」と笑われそうですが、僕は深い言葉だと今でも思っています。これからもいつまでも経法魂を胸に走り続けたいですね。

7月11日(土)14時から大阪市天王寺区の上本町にあるシェラトン都ホテル大阪で第28回校友会総会が開催されます。今回の目玉は地域活性化プロジェクト縁GIN 栞山理事長の講演です。我々が生きていくうえで、人と人の繋がりによる地域や職場(組織)等のコミュニティの大切さと尊さを語って下さい。まさに今回の総会のテーマ『絆』にリンクします。

今号の3ページで東京支部長の福岡慎吾さんが「校友会は名刺交換の場ではない。名刺の無い方も歓迎！」と書かれています。vol.28・vol.29の編集後記で「名刺100枚お忘れなく！」と書いていた自分を恥じます。名刺を持ってなくてもまったく構いません。友人と一緒になくても遠慮なくお気軽に御出席ください。素晴らしい仲間が待っています。そして一緒に一段上に進みましょう。当日、皆様にお会いできることを楽しみにしています。

会報作成チームリーダー 山下 浩希

大阪経済法科大学校友会事務局

〒581-8511 大阪府八尾市楽音寺6-10
TEL/FAX 072-941-8268
E-mail kouyuuikai@keiho-u.ac.jp

(お問い合わせ受付時間)火・水・金曜日 10時～16時
上記以外はFAX及びメールにてお問い合わせください。

校友会報掲載内容については、校友会事務局までお問い合わせください。

広報部会報
作成チーム

山下 浩希 (法学部10期生)
中津 広志 (法学部13期生)
安田 貴則 (法学部29期生)
富山 源太郎 (経済学部32期生)
西山 蓮 (経済学部45期生)